

## 進捗状況の概要

初年次教育におけるアクティブ・ラーニングは、これを実践する授業科目数（教員数）が増えるとともに、そのコンテンツやメソッドについて知見や情報を共有する機会を複数回持つことができ、今後さらに充実することが見込まれる。これは受講する学生の意欲を喚起するし、知的好奇心をさらに刺激することにつながる。アクティブ・ラーニングについては、これまでの実績・成果を広く世に問うことも必要であると考え、リーディングス（読本）としてこれをシリーズ化することにした。その第一弾を「グループワークの達人」として2月に刊行した。この冊子は学内外に配付するとともに、LA 研修においてもサブテキストとして活用しており、グループワークのファシリテーターとして授業に参加する LA のスキルアップにつながっていくことが期待される。他方、キャリア管理能力の養成については、交渉学を授業科目として複数のクラスで展開するとともに、社会人も参加する交渉学ワークショップを複数回開催することや、その企画・運営に学生が主体的に関わることによって、参加学生の意欲や意識に大いなる刺激が与えられ、同種同様の企画の続投への期待が寄せられるようになっている。また、そのような企画・運営に関わりたいとの要望も参加学生から出され、学生の意識や意欲を高めることにつながっている。このような機会を提供するのは、学内では各種ワークショップを除けば主として初年次学生を対象とした科目群であったが、場や機会の安定的な提供が必要であるとの考えから、次年度より二年次以上の学生を対象とした共通教養ゼミを開設して、交渉学やクリティカルシンキングを継続的に学ぶ機会（プラットフォーム）をつくることにした。

このようにして育成される考動力を評価するための指標の開発については、他大学と比較して後発導入だった全学的な教学 IR の整備、全学のアセスメントポリシー制定や本学におけるキーコンピテンシーの同定など、教育学習評価基盤が整いつつある。また教学 IR の分析結果をもとにする、学部と全学との対話が促進され、まさにエビデンスベースの教育改革・改善が徐々に根付いてきたことを強く実感している。それらマクロ、ミドルの教育評価の流れが個々の授業においてはルーブリック導入に搬入されている。FD としてのデータ結果の共有やコモンルーブリックの策定などにおいて、まさに内部質保証サイクルがすべてのレベルにおいて動き始めた。